

民俗学：批判的視点から現象学のまなざしへ

ーバウジンガー著『科学技術世界のなかの民俗文化』訳者あとがきー

HU Xiaohui
戸 晓輝

翻訳：西村真志葉

はじめに

現代の民俗学はとても小さなディシプリンである。しかし、小さいからこそ危機感と自己批判意識に事欠くことがなく、それゆえつねに内省と限界の超越に挑んでおり、その結果、時として大きな局面や学派、そして価値を生み出してきた。民俗学はこのようにしてその学問の水準を保ち、さらには自らが骨董鑑定ではなく、明確な理論意識と現実への強い関心を有する学問だということを証明しているのである。優れた民俗学研究において、この理論意識と現実への関心は融合され、他のどの社会科学系ディシプリンよりも色濃くその人文的志向と価値観、現実への浸透能力を映し出す。ドイツの著名な民俗学者であるヘルマン・バウジンガーの名著『科学技術世界のなかの民俗文化』は一つの模範例と言えるだろう。本書は現代民俗学に斬新な領域を切り開いただけでなく、社会学やヨーロッパ民族学、文化人類学といったディシプリンにも広く影響をもたらした。

『科学技術世界のなかの民俗文化』はバウジンガーの教授資格申請論文であり、1961年の初版刊行以降、1986年と2005年に再版された。本書の刊行は、ドイツ語圏（ドイツ、スイス、オーストリア）の民俗学内で大きな反響を呼んだ [Jeggle/Korff/Scharfe/Warneken 1986: 9]。その後数十年にわたり、ドイツ語圏民俗学の大家たちはほぼ漏れなく評論を寄せている。たとえばスイス人民俗学者ではリヒャルト・ヴァイスが本書を真に十分な意味において記念碑的作品だと評し [Weiss 1961]、ドイツからはヘルベルト・フロイデンタールが学術書というのは一次資料を補充し加工するか、新たな領域へ邁進するかのいずれかだが、バウジンガーの著書は後者だと述べている [Freudenthal 1963]。またある者はバウジンガーが本書を通じて1945年以降のドイツ民俗学の方向付けに寄与したとし [Schneider 1993]、さらには民俗学に深い刻印をきざんだ本書を民俗というディシプリンの偉大な古典的作品と見なす者もいる [Eberhart 2008]。

たった一冊の本が、なぜ一つのディシプリンの転換を促すことが可能だったのだろうか。いかにしてディシプリンの歴史において画期的なまでの影響と意義を持ちえたのだろうか。読者の考えはそれぞれ異なるだろうが、一つ確証を持って言えるのは、それは作者の年齢や身分によってではなく、その思想と業績によって実現された、ということである。バウジンガーが啓発に富み、深い内省を促す学術書を生み出すことができた理由として、ここでは民俗学の伝統への批判および現象学の方法の運用に注目し、論じてみたい。

1. 批判的民俗学とはなにか

バウジンガーがドイツ民俗学界に足を踏み入れた1950年代、それはまさにこのディシプリンが戦前の学術的伝統を猛省し、脱ナチズムに奮闘していた最中のことだった¹。Das Volk 概念の脱イデオロギー化によってドイツ民俗学は批判の時代へ突入するが、その批判的民俗学(kritische Volkskunde)の代表と目されたのが、バウジンガー率いるテュービンゲン学派だった [Scholze 1994]。ドイツ人学者が言うところの批判は、テュービンゲン学派が1960年から1970年代にかけて巻き起こした論争、さらには個人的確執とも無関係ではなかった会議上での舌戦なども含んでいると思われる。しかし私は、この批判という概念が、ドイツ語の学術の伝統において有する独特な意味の方を強調したい。それは単純な批評あるいは是非や正誤を安易に判別することではなく、問題に対する精密な審議と厳格な判断を意味する。また、それにより表現されるのは主観的意見ではなく、あくまで客観的な認識である。言葉の成り立ちまで遡れば、ドイツ語の形容詞 kritisch (批判的) と名詞 kritik (批判) はどちらも「分ける、選ぶ、決める、判断する」を意味する古代ギリシャ語 κρίνω に由来し、その名詞は ἡ κρίσις つまり「決定、判断」となる。この言葉から派生したものには、ドイツ語 Krise (危機、緊急事態) と英語 Crisis (危機、転機) があり、両者の元々の意味は「決定と判断を下す必要がある時」である。よって、批判とはドグマに相対する概念であり、冷静な決断と理性的な評価、そして厳格な検証と論理的立証の手続きを意味する。

個人的には「批判する民俗学」と呼んだ方がより正確だとも思うが、中国語の一般的な用法にはない言い方であるし、そもそも中国語にはドイツ語圏でカント以降、批判という言葉に賦与されてきた意味に対応する言葉がない。カントの言葉を借りれば、批判は独断論的な行為機能(Verfahren)ではなく、むしろ独断論とは正反対なものであり、批判の対象となるのも命題ではなく、命題の論証である。言い換えれば、カントの3批判書(『純粹理性批判』、『実践理性批判』および『判断力批判』)に準じて批判的民俗学を理解すると、それは学者個人に矛先を向けることではないし、個人間の主観的な因縁と関係づけられもしない、もちろんかつて中国に存在した政治闘争や学術上の人身攻撃とはまったくの無関係である。客観的に、おおらか且つおだやかに「事実を列挙し道理を述べる」精神に特徴づけられているという意味で、また主張する声の大きさと説得力の有無が決まるのではないという意味で、ドイツ語圏の主流の民俗学を批判的民俗学と総称することができるだろう。しかし、中国式アナロジーにより理解される批判には、こうした精神が欠落している。批判という言葉は異文化コンテクスト下で本質的な差異を有しているものであり、そしてその差異はたやすく黙殺されてしまう。よって、ここで述べる批判的民俗学が、中国の文化的コンテクスト下で用いられる批判という言葉の意味をもって理解されることは、なんとしても防ぎ、拒否せねばなるまい。

さて、一つのディシプリンの発展とは、多くの主観的意見に支えられるのではなく、演繹と反駁が可能な客観的知識の蓄積によって、促されるものである。批判とは感情のせめぎ合いではなく、論証と論理に基づく論難であり、知識の蓄積と学術の発展にもっとも有効な手段の一つである。なぜなら、学術の伝統を批判してこそ、その伝統とのあいだに分析・選択・対話の関係を築き、先人の跡を継いで前進することが可能となるのである。バウジンガーが「伝統へ

の批判」において指摘したように、伝統の研究は伝統に関する理論を前提にしている、つまり伝統に対する批判をその起点に据えようとしているのであって、その結果、伝統が破棄されたり、あるいは有意義に保持されたりするのである。私たちは伝統という概念を中立化し、この概念が有する積極的所有と消極的所有という二つの可能性を考慮せねばなるまい。伝統という概念は、創造性を重視することを排除しないのである。時間軸のうえからいえば、民俗学者の特殊な目標は、過去のものを現下で活かすことにある [Bausinger 1969]。バウジンガーもまた、ディシプリンとしての民俗学の基礎と伝統のうえに立ち、ヘーゲルのように伝統を止揚 (aufheben) した。そこには「止 (排除、破棄)」と「揚 (発揚)」という行為が含まれており、それはドイツ語の aufheben が「保存」および「撤去」という二つの意味を持つとおりである。ここにも伝統文化とディシプリンの伝統に対するバウジンガーの弁証法的な態度と批判精神が、強く反映されている。

バウジンガーの研究は批判的民俗学の典型例だと言えるだろう。彼が異なる時期に記した論著を紐解いてみても、類似する記述が見受けられる。たとえば「民俗学の批判と自己批判 (Kritik und Selbstkritik der Volkskunde)」 [Bausinger 1987] や「民俗学に対する批判 (eine Kritik der Volkskunde)」 [Bausinger 1969] などがそうであり、また「ナチズム民俗学への批判的論述は当面の急務 (eine kritische Darstellung der nationalsozialistischen Volkskunde ist ein dringendes Desiderat)」 [Bausinger 1965] や「批判的社会科学への支持表明 (Das Bekenntnis zu den kritischen Sozialwissenschaften)」 [Bausinger 1965] といった記述も見られる。バウジンガーは連続性 (Kontinuität) や非同時性 (Ungleichzeitigkeiten)、伝統および沈降文化財 (gesunkenes Kulturgut) などのドイツ語圏民俗学の基礎概念と伝統的な論題について、専門的な論述、分析、批判を加えている。こうした研究は特定個人を非難しているのではなく、あくまで論理上客観的に概念を分析するか、冷静に問題を論じるかしており、批評的民俗学の実践と見なしてよいだろう。私が考える批判的民俗学の実践は、かならずしも純粋な理論として示されなければならないわけではなく、より具体的な研究において表されてもかまわない。バウジンガーの民俗学研究はまさにこうした具体性と抽象性を兼備した批判的民俗学の実践例である。実は民俗学の具体的な研究に一貫して批判のままざしを注ぐというやり方はより難易度が高く、それゆえことさら貴重だと思われる。

バウジンガー自身の言葉を借りて、批判的民俗学の基本的な意味を次のように理解することができるだろう。それは「流通する基本概念に批判的な再検討を行う (kritische Überprüfung der gängigen Grundbegriffe)」ことである [Bausinger 2006:40]。バウジンガーが多くの論著において行っているのはこうした研究であり、『科学技術世界のなかの民俗文化』もまた、それが前提として基礎に据えられると同時に、批判的精神で全編が貫かれている。そして、その批判的精神と弁証の鋭さに満ちた民俗学研究が打破しようとしているのは、古い命題に留まらず、古い命題の論証も含まれる。一方構築しよう目指しているのは、新たな命題、そして新たな命題の論証である。バウジンガーにとって、打破はよりよい構築のためというよりも、よりよく見るため、つまりよりよく事象そのものへ立ち返るためだといった方がよい。なぜなら、彼は民俗文化の実際的な存在状況と本質的關係を見たいと願ったのであり、なによりもまずそのままざしを遮る障害物を取り除かねばならなかったのである。そして原理的な概念と観念こそが、批判という形を用いて取り除かねばならなかった主な障害物なのだった。

この批判という任務は、いかにして成し遂げられるべきだろうか。おのずと他山の石を借りる必要性がでてくる。もともと文学部出身のバウジンガーは読書の幅が広く、フランクフルト学派の批判理論やカントとハイデッガーの哲学に親しんでいた。その膨大な読書量と広域にわたる興味領域は、『科学技術世界のなかの民俗文化』の引用や論述からも明らかであり、本書が刊行されると民俗学界から「これは民俗学なのか」という声が上がったほどだった。たとえばオーストリアのレーオポルト・シュミットは『科学技術世界のなかの民俗文化』の初版を評して、民俗学というディシプリンはバウジンガーのような記述方法には慣れておらず、自分が作者ならば本書で大量に引用されている著名な文学者の言葉はすべて排除しただろう、と述べている [Schmidt 1961]。もちろん、バウジンガーがこのように多領域の文献を引用したのは、単に研究の視野を広げるためだけではなく、かつての理論的判断やディシプリンの知識をエポケーし、民俗文化の本来の状態を直接人々に見えるように提示するためだった。

弁証法的な批判の視点は、迷宮を抜け出し、民俗文化の動的本質を直視するよう、比較的早い時期からバウジンガーを促していた。1951年、バウジンガーは処女作となる論文「伝説は生きた口承伝統か」を発表した [Bausinger 1951]。翌年完成した博士學位申請論文「現代に生きる語りもの」も、ヴェルテンベルク州東北部で語り継がれる口承伝統の研究である。ここから分かるように、生きているという動的状態は、非常に早い段階からバウジンガーの視野に入っており、彼が民俗文化の実際的な生存状況を把握しようとしていたことを示唆している。だが、こうした生きている状況はいかにして把握されるのだろうか。また、つねに何かしら静態的な状況が存在するのだろうか。もしも存在するとすれば、それと動的状況の関係をどのように理解すればよいのだろうか。このような状況や関係性を理解しようとするならば、現象学式の還元が必要になってくる。

2. 現象学：それ自体として見ること

バウジンガーの特異性は、彼が単純なケース研究に満足せず、根本的解決に向けて理論的難題に立ち向かい、民俗文化の現象学研究という道を切り開いた点にある。もしも理論的な感性と現象学的手法への自覚がなければ、30歳を過ぎたばかりの青年学者が『科学技術世界のなかの民俗文化』という早熟な作品を生み出すことはできなかつただろう。ここで早熟というのは、本書が半世紀のあいだ修正の手を加えられないまま3度も版を重ねてきた、さらに現象学的本質直観の模範ともいえる意義をすでに示している、という意味である。そしてこれらはすべて若かりし頃のバウジンガーが理論に対して敏感な感受性を有していたことと無関係ではない。

1970年、バウジンガーは「民俗学における理論への敵視について」を発表し、自身の理論直観について述べている。同文では、民俗学に精巧な理論が欠如しているばかりか、どんな理論的努力であっても民俗学者の反感を招くという点が批判されている。こうした現状を生み出した原因は三つある、とバウジンガーは考えた。

まず関係があるとされたのが、雑多な民俗資料の蓄積である。資料が雑多であればあるほど理論の欠乏、欠陥は暴露される、雑多な資料がその多様性・多層性ゆえに理論の欠陥を補って

くれるわけではない、今後蓄積される資料がさらに増えたところで理論は生まれえない、それは理論がそもそも資料から導かれるものではないからだ、とバウジンガーは考えた。また彼は、踏み込んだ分析や論証もないまま、理論の全体像を無視して、他のディシプリンから理論のエッセンスとして方法や視点を借りる、という民俗学にはびこるやり方も批判している。民俗学の新たな一歩はつねに新しい資料の形で表現されるように見えるが、バウジンガーから見ればそれはまったく不十分であり、むしろそうした考えこそが民俗学が理論で足を止めてしまう、さらには理論に反感を抱く原因になっている、と指摘した。

第2の原因として、民俗資料そのものの特性が理論の構築に不向きかもしれない、という点も指摘された。少なくとも19世紀以降、民俗学は家屋や民具、民謡、習俗、童話、伝説といった文化の客観的形式を研究してきた。内省の精神に欠けた採集者は、偽実証主義（Scheinpositivismus）に基づいて自然科学の研究パラダイムを標榜したが、その自然科学も理論的仮説に基づいて研究していることを知らずにいた。結局、膨大な新しい資料の蓄積は人々を新たな領域へ導くことはなく、古い基盤の上で足踏みさせるばかりだった。バウジンガーが民俗学における実証主義や偽実証主義に加えた批判は、短い言葉でありながら、このディシプリンを蝕む病巣を的確に突いている。

最後に、理論を放棄し現状や現存するものに賛同するという行為は、古い経験から新たな結果を推測するのに役立つ、つまりこの行為自体が実際は経験主義的实践なのだ、という点が第3の理由として挙げられた。カントの「理論では正しいかもしれないが実践には役に立たない、という通説について」に触発されながら、バウジンガーはさらに踏み込んで、理論的分析があってはじめて現状や現存するものについて批判的分析が可能となり、これらを盲目的に繰り返す以上の実践が推し進められる、と述べている。また、カントの「理論と実践」から例を引いて、一部の医師や法学者は学業で優秀な成績を取っているが、判断力の欠如ゆえに実際の現場で問題に直面すると手も足も出なくなる、と述べている。だからこそ、医学の実践には応用的な諸条件の研究が不可欠なのである。そして、さまざまな可能性と諸条件を研究する科学的実践は、すべてこの可能性と条件に対する理論的内省を前提としている。つまり民俗学においても、その採集以前の段階で、また採集過程において、習俗や習慣、社会的意味及び心理的背景に理論的内省を加えてこそ、真の科学的実践がようやく可能になるのである [Bausinger 1970]。

これは実質上、真の研究とは無分別に資料を積み上げたり、今あるものを受け入れたりすることではなく、単純な表面的現象に留まるのでもなく、感性的直観から本質直観へ入る必要がある、という指摘である。また、次のように言い換えることもできるだろう。現象学の理解に基づいて見れば、本質直観は感性的な直観をその起点にはいるが、感性的直観に留まることなく、感性の領域を超越し、本質的な認識を提示しなければならない。本来の意味における現象学研究は感性的直観に満足してはならず、本質直観を指さねばならない。そして、直観的に見るということは、本質を直接把握することなのである。

とはいえ、別の角度から見れば、新しい現象や資料は新しい理論や領域によって切り開かれ、見出されるものであって、その逆ではない。バウジンガーも『科学技術世界のなかの民俗文化』の第1章で次のように不満をこぼしている。「近年の民俗学の展開にさいしても、新しい適切な概念やカテゴリーを創りだすのではなく、新しい対象や新しい人間集団をも、昔ながらの概念でとらえようとするのが一般的なのである」。ここに、バウジンガーが収めた成功の秘訣を感じ取る

ことができるだろう。それは、彼が単純に方法や視野を借りるに留まらず、理論の総体性や理論的まなざしによってもたらされる洞察力および判断能力をより重んじた、という点である。パウジンガーは純粋な理論家ではない。しかし、現象学の理論的判断力を、経験的な具体例をめぐる描写と考察に融合させた。これにより、他の者が思いもよらぬことに思いを馳せ、先人が見えなかったものを見ることができた。そしてその結果、民俗学を保守的な上古学研究から批判的文化分析へと推し進めることが可能になったのである。実際に、パウジンガーは1971年に出版した『民俗学』に「上古学の克服から文化分析の方法へ」という副題を正式に掲げている [Bausinger 1971]。この転換は、実証研究から現象学研究への転換、つまり過去の文化の間接的証明から現下の文化現象および本質的経験に対する直接的な分析と把握への転換でもあった。ここで重要なのは、物理的な時間要素ではなく、私たちの意識と経験において直接賦与される現象の動的関係およびその本質的構造要素を分析する、という点である。執筆中、パウジンガーは具体的な事例から筆を進めることを好み、これにより読者は感性による経験的認識を持ちやすくなる。しかし、具体的な経験から書き進めることは、パウジンガーの理論の起点がすなわち具体的な経験だという意味ではない。同様に、彼の提唱した経験文化学イコール経験主義的文化学というわけでもない。

2006年、パウジンガーにインタビューを試みた際、次のように解説をしてくれた。「経験的研究はかならずしも実証研究にならねばならないわけではなく、理論的研究や実践的な研究でもありうる。」「私たちはアメリカ式の経験的社会研究になりたくはない。なぜならそれはあまりに統計学や定量的研究に近すぎ、私たちのやりたいのは質的研究なのだ。これは人々が私たちの問題にどのような感想をもつか統計できないことを意味していて、私たちはもっと人々の生活に歩み寄ろうとしている」 [戸暁輝 2006]。言い換えると、パウジンガーの経験は下からの (von unten) 経験だけではなく、現象学的まなざしで見いだした経験であり、具体性における抽象性、経験における先験性なのである。彼は自らの方法を現象学的考察と呼んだが、対象をそれ自身として見よう、その表面現象ではなく現象の本質を見よう、としたのである。これを実現するには理論が必要だが、ここでいう理論とは経験主義的な意味における先入観やドグマではなく、現象学の理論的まなざし、対象をそれ自体として見るまなざしのことであり、現象の本質そのものを表出させる還元のことである。こうしたまなざしを手に入れるためには、現象の本質の表出を覆い隠すすべての理論や先入観を排除、批判し、過去の知識と理論をエポケーしなければならない。

1971年、パウジンガー主導のもと、テュービンゲン大学民俗研究所は経験文化学研究所と改称し、現在に至るまでドイツ語圏で独自の道を歩んでいる。それがもはや民俗学ではなく社会学に近いという意見もあるが、なんにせよ、その名前に掲げられた経験は経験主義的な意味における経験ではない点を強調しておきたい。

3. 本質直観：現象学の方法の具体的な応用

パウジンガーの主な目的は、理論のための理論を構築することではなかった。彼は単純な理論家ではないし、そうなりたいたも思っていなかっただろう。彼の批判的民俗学はいわば必要な序章にすぎず、その研究手段にすぎない。いわゆる経験文化学も、その議論を経験文化や文化的経験に収斂しようとしている。しかし、パウジンガーが実際に見て、描写した経験と、一般的な日

常経験、さらには多くの民俗学者が目にしてきた経験はまったく異なっている。彼の描写や示唆を通じて、読者は目の前が開けたような感覚を受けるだろう。さらには、彼の描く民俗文化の経験が、よりダイレクトかつ流動的に自身が持つ真実の体験と合致するように感じるかもしれない。だが、次のように問う読者もいるだろう。なぜバウジンガーがこうした経験を直接見ることができるのに、自分は自らの真実の体験とこんなにも隔てられ、そこにあるのに見えず、聞こえず、すれ違ってしまったのか、と。

簡単に言えば、それは私たちの日常経験がたいてい覆い隠されている、つまり多くの先入観や既成概念によって理論化されているためである。私たちが有しているのはほとんど現象に関する経験にすぎないが、バウジンガーが描写したのは本質に関する経験だったのである。彼の着眼点は「去偽存真（偽物を取り去り本物を残す）」と「破旧立真（古い習慣や思想を打破して新しいものを打ち立てる）」だが、ここで打破したかったのは実証主義的な実体实在論であり、打ち立てようとしたのは弁証法哲学的な関係实在論だった。つまり、バウジンガーは静止、孤立させた状態で一つ一つの実体を観察するのではなく、弁証法的運動と対立の転換において現象間の本質的な関連を還元し、そこに含まれる矛盾とパラドックスを提示しようとしたのである。だからこそ経験と現象のあるがままの状態へ立ち返ることができたのであり、静止し、閉ざされた社会観を打ち破り、かつての民俗文化観と残存物観をエポケーすることもできたのである。

方法論の上からいうと、『科学技術世界のなかの民俗文化』は、フェルディナン・ド・ソシュールの『一般言語学講義』と似ている。それは系統的・構造的（共時的）研究であり、局部的・歴史的（通時的）研究ではない。その「序」では次のように述べられている。「民俗学のカテゴリーは、社会的基盤や文化的な文物のモチーフ史的連関をまず追究するのではない。それは特殊な精神形態が、特定の社会的基盤において特定の文化的文物を生起せしめる様相を把握せんとするのである。本書では、民俗文化のためのかかるカテゴリーを、科学技術世界のなかにさぐることを試みた。」（訳者注：同書の主旨は）「（歴史性よりも、体系性に主眼を置いているため）、民俗学の個別領域それぞれの内部展開をたどることにはなく、すべての（あるいは、多くの）個別領域に共通した射程の大きな視点を獲得することにあつた。」これを言い換えれば、本書は民俗学のケース研究ではなく、民俗学の普遍的課題を研究する、ということである。しかし実際に読み進めていくと、本文には1950年代から1960年代にかけてのドイツ語地区、さらにはドイツ南部に限定された民俗文化現象や実例が数多く登場する。これにより、バウジンガーが論じているのは中国とは無関係の異国の事案だという印象を、読者に与えることだろう。しかし、バウジンガーが実際に提示しているのは、ローカルナレッジではない。そこに登場する資料がドイツやドイツ語圏のものだとしても、論じられている問題は特定の時代、特定の土地に限定されないのである。たとえ引用される多くの実例が時代遅れになったとしても、その論証の方法や結論、さらにその現象学のままざしは時代を問わない。それはバウジンガーが特定の時空に属する事案と資料について、系統的・構造分析的研究を行っているためである。あるいは、通時的資料について共時的研究、さらには現象学の本質直観を試みているためである。その結果、資料は時代と場所に制限されることなく、普遍的に参照可能な意義と価値を獲得しているのである。

もちろん、いかに本書で引用される資料の豊富さが驚嘆に値し、時に過剰とも思われるほどであっても、より賞賛されるべきは、その論述と資料運用の卓越した技巧の方だろう。1962年にはすでに、バウジンガーが伝統的な民俗文化と現代民俗文化、そして日々複雑な機械を用いて勞

働する人々を和解させようと努めている、と理解した者もいた。だが同時に、現代の民俗文化はかならず伝統的な民俗文化から規則的に生み出されるものなのか、という疑問も投げかけられた [Fojtík 1962]。これは非弁証法的な見方が弁証法的見方に抱く疑問、そして非現象学的見方による現象学的見方への無理解にすぎない。おそらく、『科学技術世界のなかの民俗文化』におけるバウジンガーはいぜんとして保守的だ、という者もいるだろう。たしかに、彼は古い領域を徹底的に放棄するのではなく、かつての概念に新しい機能を持たせようと試みている。たとえば本書の冒頭において、住民という概念をもって民衆 (Das Volk) に換えようというプレヒトの文を引用しつつも、バウジンガー自身は民衆という概念を手放していない。しかし実際には、民衆を抽象的な集合名詞から普通の人や一般人を指す固体名詞に換えるというかたちで、プレヒトの初志は実現されている。つまりバウジンガーは、普通の人や一般人の日常生活に立ち返り、そのなかで民俗文化と技術世界の実質的な関係と動的プロセスを観察し、そして両者がいかに交錯しながら人間の生活世界を構成するのを見ようとしたのである。1961年4月27日、バウジンガーはボンで開かれたドイツ民俗地図をめぐる学会において、「民俗文化と工業社会」と題して発表を行った。そのなかで、多くの民俗学者は民俗文化が技術世界に依存しないと考え、社会学も工業社会が伝統的な意味における民俗文化から孤立したものと見なしているが、実際には両者が混じり合っていることを指摘した。工業社会の民俗学的問題は、工業企業の行為規範に関する研究に限定される課題ではなく、むしろ民俗学全体を覆っているものであり、しかも相当な歴史を有しているのである [Bausinger 1962]。

同年に出版された『科学技術世界のなかの民俗文化』でも、静的な二元対立を打破し、動的な弁証法的対立関係を構築しようという同様の努力がなされており、そこには民俗学というディシプリンをめぐる内省思想の叡智が光を放っている。第1章でまず直視されたのが民俗世界と技術世界の対立という問題であり、当時の民俗学においては斬新なテーマだった。技術は新たな物質世界を創造しただけでなく、新しい社会的・精神的現実をもたらした。このことは技術の内実がツールではなく、人間と世界の関係、さらにそこから変容した人間と人間の関係だということを示した。バウジンガーは膨大な事例の分析を通じて、技術が民俗文化に組み込まれているのはもちろん、技術的ツールとモチーフもあらゆる民俗文化の領域に入り込んでいることを指摘した。一方の技術世界も民俗文化に対してなんら免疫力を有しておらず、技術世界に入り込んだ民俗文化によって、古い考え方へのさまざまな回帰や退行がもたらされている。おそらくこのためだろう、ベルント＝ユルゲン・ヴァルネッケンは、この『科学技術世界のなかの民俗文化』は『民俗文化のなかの科学技術世界』とも言えると述べている [Jeggle/Korff/Scharfe/Warneken 1986: 10]。いずれにせよ、技術と民俗文化はともに人間の生活世界を構成しており、これはユルゲン・ハーバーマスのいうところの「生活世界の植民地化」の表出だと言えよう²。バウジンガーは「今日では、科学技術は、素朴な人々たちにとってすら、慣れ親しんだ日常の環境となっている。これは、目下の脈絡にとってはきわめて重要なことがらである」と指摘し、技術が人間の第2の自然 (zur zweiten Natur) になっていると述べた。そしてこの点が、本書に難題を突きつける。それは、技術が民俗文化を変容させる原因であると同時にその結果でもある、ということである。そこでバウジンガーは現象学の観点から民衆主体の地平の融合を考察し、古い地平の解体プロセスと新しい地平の構築・融合プロセスを研究した。そして空間、時間および社会の側面から、民俗文化と技術世界が互いに制約し、影響を及ぼしあう本質的關係について具

体的な分析を展開してゆくのである。

まず第1章では、民俗世界（村落、共同体、有機体、非理性、自然、シャーマニズム、非歴史性）と技術世界（都市、社会、組織、理性、非自然、非シャーマニズム、高度歴史性）の同系列的な二元対立が打ち破られた。第2章では横の空間軸からふるさと概念の地平の展開について、また第3章では縦の時間軸から民俗文化の加速度と歴史化について、それぞれ議論されている。そして第4章にいたって、縦・横あわせた角度から社会等級文化の解体と交錯という問題が論じられた。いずれの章においても、研究対象となったのは、民俗世界と技術世界のあいだの弁証法的対立および相互作用の本質的關係である。これらはすべて、民衆の主観的地平の変容プロセスを還元することにより得られた結果でもある。もしも第1章が本書の最終目的だとすれば、それに続く3章は最終目的の分解である。バウジンガーは大きな概念の枠組みのもとで、具体的に見える諸要素を組織、収容し、複雑に姿を変える現実の情景を提示して見せた。これは現象学のみなざしを通じて見られた民俗文化であり、多くの民俗学者がその論著において描く民俗文化よりも複雑で、弁証性が高く、より真実に迫っている。このように問題を分解し、理路整然とした論述を解きほぐしてゆく手法は、まさに現象学的本質直観という方法の表出であり、民俗学の分野ではあまり類例がない。バウジンガーがフランクフルト学派の批判理論に影響、啓発されているのは間違いないが、その論述の技巧について言えば、現代的な観点よりも、古代ギリシャの目的論的技術観から多くを受け継いでいる。それはバウジンガーの論述技巧に関する見方が前時代的、という意味ではない。その技術観を同時代の民俗学者と分かちつのは、古いか新しいかではなく、弁証法的かそうでないかという点だろう。

また、マックス・リュティが述べるように、バウジンガーの理論のみなざしと思考形式は、尋常でない変動性を有しており、その力強い概念を生み出す能力ゆえに、本書は各方面において啓発に満ちた読み物となっている [Lüthi 1962]。その結果もたらされるのは、日常生活の発見や啓発、ディシプリン領域の開拓に留まらない。いわゆる単純な民衆と普通の人間の発見および解放、そして民俗学というディシプリン自身の解放も、またそうである。なぜなら、本書よって民俗学は民衆と普通の人間が持つ創造性と主体性を発見し³、また実際の民俗文化が「自由の潜在能力と進歩の潜在能力」[Bausinger 1985]を有していることに気づき、かつての単純な受動性や硬化状態から抜け出すことが可能となったのである。イデオロギーの束縛から抜け出した後、民俗学は逆に社会の民主化に有益な力となった、たとえそれが直接かつ即実的な力ではなかったとしても、少なくとも間接的・認識的に押し上げる力となったと言えるだろう。このことはバウジンガーが第3章で応用民俗学を批判する際に引用した、フリードリヒ・マイネッケの次の言葉を証明することとなった。「学問が人間の生き方に役立つのは、直接にはではなく、間接的でなければならない。学問が厳密かつ厳格に自己規定をとげる度合がたかければたかいほど、作用力をつよめることが多いのである」。民俗学者は現実の民俗の保護という問題を避けられないし避けてもならないが、それ以前に学問の応用をめぐる理論的前提を整理しなければならない、とバウジンガーは敏感に指摘した。半世紀も前にこうした指摘がなされたことは、近年中国民俗学内ですます過熱化するいわゆる無形文化遺産保護業務に大きな啓発をもたらすことだろう。

『科学技術世界のなかの民俗文化』は問題提起から始まり、問題の解析、分解そして展開を通じて部分的な解答を行った後、最終的に起点に立ち戻って再び問題を提起する、という螺旋状に上昇する認識の運動プロセスを表現している。その後もバウジンガーは膨大な数に上る論著を記

し、また数多くの学生を育てることで、テュービンゲン学派創設の基盤づくりに大きく貢献したが、個人的には本書こそがテュービンゲン学派の揺るぎない基礎石となり、さらに言えば1970年出版の『民俗との決別』[Bausinger/Korff/Scharfe/Schenda 1970]がこの学派による厳粛な宣言書だったと考えている。1986年、バウジンガーは『科学技術世界のなかの民俗文化』第2版出版の際、そのあとがきで、「民俗学が守旧を旨とする古体研究から、批判的な文化分析へと推移している」とし、同書は「その行程のひとつまにほかならない」と謙虚な言葉を記している[Bausinger 1986]。だが私は、バウジンガーのすべての論著のなかで、『科学技術世界のなかの民俗文化』には唯一無二の意義があり、しかもある意味それを超えることが難しい価値を有している、と考える。なぜなら後の論著においてその系統性と思考の深さにおいて本書を超えるものは一つもない、と思われるからである。そしてこれが、私とその複雑さと難しさを承知しながらも、本書を翻訳しようとした重要な理由でもある。

もちろん、バウジンガーが専門的な理論家でないことは、再度強調しておかねばなるまい。彼は系統的な純理論書の一つも書いていないし、自身でもいくつかの場において壮大な理論は好まないと明言している。この発言には謙遜の意味も含まれているだろうが、一つの実情を示している。バウジンガーの理論は確固たる理論として提示され、今日まで評価されているのではない。それはすでに原理と作用が結合した現象学のままざしと化し、「化して春泥となり更に花を護る」という詩句そのままの理論的視野となっているのである。彼の研究実践によって、理論的素質が純粋な理論的論著においてのみ、あるいは作者に自覚される理論的欲求としてだけ表現されるものではないことが、再度証明されたと言ってよいだろう。バウジンガー以外にも、ドイツ語圏の多くの民俗学の論著から、程度の差はあれ、高い理論的素養が見て取れる。これはこの土地が持つ厚い思想的伝統が民俗学の領域で表出した結果であり、近年私がドイツ語圏の民俗学論著を好んで読み、訳している理由でもある。

テュービンゲンという街は、古くから多くの思想家を輩出してきた地である。2006年夏、私はここを散歩しながら、『陋室銘』の一節、「山は高きに在らざるも、仙有りて則ち名とす。水は深きに在らざるも、龍有れば則ち靈たり」という言葉感慨深く反芻していた。この町で活動してきたバウジンガーは、民俗学界の思想家と呼ぶべき人物である。バウジンガーという仙が[・]あってこそ、テュービンゲンの民俗学はその名を獲得し、バウジンガーという龍が[・]あったからこそドイツ民俗学は^{ウツウツエ}靈を纏うことができたのだろう。6月10日午後、呉秀杰博士とともに訪ねた80歳のバウジンガーはユーモアに溢れていた。身のこなしも軽やかで、自ら運転する車で私たちを自宅まで連れて帰ると、インタビューさらにはホームパーティーと、とても快活だった。彼の家はテュービンゲンの中心部から10キロほど離れたロイトリンゲンにあり、彼がそこに住み始めてからすでに34年の月日が経っていた。

ドイツへ赴く前、私は本書の英訳本とドイツ語原著の一部を読んだことがあった。英訳本には一般的な文法から外れた言い回しが含まれており、理解しづらい箇所が少なくなかった。これは翻訳が拙いというよりは、もともとバウジンガーの文章スタイルが特別分かりやすいものではないためである。さらに本書ではドイツ西南部の民俗事象が実例として多数挙げられており、たとえドイツ人読者でも北部の人間ならば初見の例にとまどうことも多いだろう。また私自身、ドイツ語を流暢に扱えるわけでもない。おそらく、私は本著の訳者として最善の人選ではなかっただろう。しかし、待ち続けて数年が過ぎ、髭に白いものが混じり始める頃になっても、理想的な訳

者は現れず、私が本書の翻訳に立ち向かうより他なかった。2008年、かねてから申請していた中国社会科学院の科研が採択され、本書の翻訳もそこに含まれていた。当初はこの翻訳に数年を費やすつもりであり、翻訳しながら自らを鍛える、ある種の修行のように考えていた。しかし後に呉秀杰博士から、本書を彼女が訳したパウジンガーのインタビュー録と一緒に出版しないかと誘いを受け、私はこれに喜んで同意した。ドイツ訪問時、私は彼女からさまざまな手助けを受け、さらには校正の労も取ってもらった。その際、誤った解釈の修正だけでなく、専門用語の訳し方や翻訳法、翻訳観などの面においても大変参考になるアドバイスをもらい、そのほとんどを私は採用している（たとえば当初『ドイツ語訳名ハンドブック（徳語訳名手冊）』に基づいて ^{パオシングァール} Bausinger を ^{パオシングァー} 鮑辛格爾と訳していたのを、彼女のアドバイスに従って鮑辛格へ変更した）。彼女にはここで心からの感謝の意を表したい。もちろん、個別的な訳し方については自らの主張を通したので、誤訳の責任は私にある。本書におけるその他の人名、地名などについては一般的に使われている訳名に基づいて訳しており、準拠した辞書類は次のとおりである。

- 新華通社訳名室編 2007 『世界人名翻訳大辞典』上、下 修訂版 中国对外翻訳出版公司
 新華通社訳名室編 1999 『徳語姓名訳名手冊』 修訂版 商務印書館
 蕭德榮、周定国編 2001 『21世紀世界地名録』上、中、下 現代出版社
 中国地名委員会編 1993 『外国地名訳名手冊』 商務印書館
 中国地名委員会編 1988 『聯邦德国地名訳名手冊』 商務印書館

原書の注釈は文末にまとめた後注だが、読者の利便性を考慮して脚注に変更した。訳注と校正注についてはその旨を明記し、原注との区別を設けた。

私自身、現在出版されている多くの訳書に信頼感が乏しく、読者の信頼に足りる訳書を世に送ることが容易でないことは深く承知している。もともと翻訳の難度をある程度認識、実感し、さらに熟慮を経たうえで翻訳に着手したつもりでも、本書の翻訳に費やさねばならなかった時間、気力、忍耐力そして体力は当初の予想をはるかに超えていた。私はまずドイツ語原著に基づいて初稿を訳し、校正の段階で個別の箇所については英訳本を参照した。ここで英訳者エルケ・デトマーに感謝を述べたい。彼女の翻訳が前にあったからこそ、私はこれを参考し、助けを得ることができたのである。訳注において英訳本に見られる翻訳ミスを指摘しているが、これは優越意識のためではなく、ただただ翻訳の難しさを示し、誤りを正し、原作者の意味をよりよく表現するためである。本書において意味を確定しづらい箇所に関しては、パウジンガー自身に教えを乞うた。手紙のやりとりのなかで、彼は難易度の高い本書の翻訳に心血を注ぐ私の労をねぎらい、感謝の言葉を述べられた。知遇の恩に感じ入るばかりである。拙訳はすでに複数回の校正を経ているが、なおも誤りや不適切な箇所があるかもしれない。読者に惜しみないご指摘をお願いしたい。

最後に、ドイツのゲーテ・インスティトゥートから翻訳費の助成をいただいたことに、感謝申し上げます。

注

- 1 この問題について、バウジンガーは1965年に長編の論文を発表している。
- 2 こうしたハーバーマスの言い回しを、バウジンガーは何度か引用している [Bausinger 1985, 1987]。
- 3 バウジンガーは「人間の『受動的』な官能にはつねに一定の能動性が隠されている」と弁証法的に指摘しているが、これは民衆が受動的に伝統的な財産を受容する際に能動的にこれを支配し、創造していることを意味している。

参考文献

- Bausinger, Hermann. 1951. Sind unsere Sagen lebendiges Erzählgut? Schwäbische Heimat 2.
- Bausinger, Hermann. 1952. Lebendiges Erzählen. Studien über das Leben volkstümlichen Erzählgutes auf Grund von Untersuchungen im nordöstlichen Württemberg. Mschr. Dissertation, Tübingen.
- Bausinger, Hermann. 1962. Volkskultur und Industrielle Gesellschaft. Beiträge zur deutschen Volks- und Altertumskunde 6.
- Bausinger, Hermann. 1965. Volksideologie und Volksforschung. Zur nationalsozialistischen Volkskunde. Zeitschrift für Volkskunde 61. (「フォルク・イデオロギーとフォルク研究—ナチズム民俗学へのスケッチ」、河野真訳、『経済論集』第133号)
- Bausinger, Hermann. 1969. Kritik der Tradition. Anmerkungen zur Situation der Volkskunde. Zeitschrift für Volkskunde 65.
- Bausinger, Hermann. 1970. Zur Theoriefeindlichkeit in der Volkskunde. Ethnologia Europaea. II-III. (1968/69).
- Bausinger, Hermann. 1971. Volkskunde. Von der Alterumsforschung zur Kulturanalyse. Carl Habel Verlagsbuchhandlung; Erweiterte Auflage, Tübinger Vereinigung für Volkskunde, 1999. (「フォルクス Kunde・ドイツ民俗学—上古学の克服から文化分析の方法へ」、河野真訳、文緝堂)
- Bausinger, Hermann. 1980. Zur Spezifik volkskundliche Arbeit. Zeitschrift für Volkskunde 76.
- Bausinger, Hermann. 1985. Traditionale Welten. Kontinuität und Wandel in der Volkskultur. Zeitschrift für Volkskunde 81.
- Bausinger, Hermann. 1986. Volkskultur in Gemengelage: Nachwort 1986. In. Hermann Bausinger, Volkskultur in der technischen Welt. Frankfurt / New York, Campus Verlag.
- Bausinger, Hermann. 1987. Ungleichzeitigkeit. Von der Volkskunde zur empirischen Kulturwissenschaft. Der Deutschunterricht 6/87 od. VI.
- Bausinger, Hermann / Korff, Gottfried / Scharfe, Martin / Schenda / Rudolf (hg.). 1970. Abschied vom Volksleben. Tübinger Vereinigung für Volkskunde E.V. Tübingen Schloss.
- Bausinger, Hermann / Kaschuba, Wolfgang / König, Gudrun M. / Langewiesche, Dieter / Tschofen, Bernhard. 2006. Ein Aufklärer des Alltags: der Kulturwissenschaftler Hermann Bausinger im Gespräch mit Wolfgang Kaschuba, Gudrun M. König, Dieter Langewiesche und Bernhard Tschofen. Böhlau Verlag.
- Eberhart, Helmut. 2008. Bausinger, Hermann: Volkskultur in der technischen Welt. Österreichische Zeitschrift für Volkskunde, Neue Serie Bd. LXII (Gesamtserie Bd. 111), Heft 4.
- Freudenthal, Herbert. 1963. Hermann Bausinger. Volkskultur in der technischen Welt. In Walter Hävernick und Herbert Freudenthal (hg.). Beiträge zur deutschen Volks- und Altertumskunde Bd. 7. Museum für Hamburgische Geschichte.
- Fojtík, Karel. 1962. Hermann Bausinger. Volkskultur in der technischen Welt. Deutsches Jahrbuch für

Volkskunde 8.

Hävernack, Walter und Freudenthal, Herbert (hg.). 1963. Beiträge zur deutschen Volks- und Altertumskunde.

Band 7. Hamburg, Museum für Hamburgische Geschichte.

戸曉輝 2006 「徳国民俗学者訪談録」『民間文化論壇』第5期

Jeggle, Utz / Korff, Gottfried / Scharfe, Martin / Warneken, Bernd Jürgen (hg.). 1986. Volkskultur in der

Moderne: Probleme und Perspektiven empirischer Kulturforschung. Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.

Lüthi, Max. 1962. Volkskultur in der technischen Welt. Zu einem Buche Hermann Bausinger. Neue Zürcher

Zeitung. 18.April 1962

Schneider, Ingo. 1993. Hermann Bausinger: Folk Culture in a World of Technology. Translated by Elke Dettmer.

Bloomington / Indianapolis 1990. Fabula 34, Heft 1/2.

Schmidt, Leopold. 1961. Die "Fünfzehn Zeichen vor dem Weltuntergang" auf einem Altarwerk des 16.

Jahrhunderts (Mit 4 Abbildungen). Österreichische Zeitschrift für Volkskunde 64.

Scholze, Thomas. 1994. Die Tübinger Schule. In. Wolfgang Jacobeit, Hannjost Lixfeld, und Bockhorn (hg.).

Völkische Wissenschaft: Gestalten und Tendenzen der deutschen und österreichischen Volkskunde in der

ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts. Böhlau Verlag.

Weiss, Richard. 1961. Hermann Bausinger. Volkskultur in der technischen Welt. Schweizerisches Archiv

für Volkskunde 57.